



3・11を前にして

—— 大槌からの報告

再び3月11日が巡ってきます。震災から2年、当会が昨年建設した岩手県大槌町の「こどもセンター」での活動は、地元住民の方々に移行しています。その中心である保育士が大槌町とセンターの最近の様子を報告します。

復興を願う神輿

昨年9月、新漁協発足後初の定置網の水揚げが行われました。この日漁に出た二艘の漁船の水揚げ量は3トン以上だったそうです。震災前に比べると少なかったようですが漁師さん達からは喜びの声が聞かれました。震災や前漁協の破産等、様々な困難を乗り越えての水揚げ…大槌の漁業の火がこれからも消えることの無いよう願うばかりです。

9月22日、23日には2年ぶりとなる大槌稲荷神社神輿渡御祭と小鉤神社神輿渡御祭が行われました。虎舞、神楽や鹿子踊り等、16の郷土芸能団体も祭りに参加し、多くの見物客で賑わいました。2013年の秋より被災

地区の盛土が行われる予定で、震災前の道路を歩くのはこれが最後になるかも知れません。せめて最後に面影ある道を担いで歩きたいと、担ぎ手達の肩にも力が入っていました。震災前に自宅のあった土地に来て祭り見物をする人たちも多く、目に涙を浮かべながら神輿に手を合わせていました。たくさんの方々に見守られお神輿は無事に町内を歩き終えました。

11月、大槌町と釜石市の水産加工会社が企業立地協定を結びました。安渡地区の魚市場付近に工場を整備し2013年の10月に操業開始予定とか。町の基幹産業である水産業の活性化と雇用の拡大が期待されます。

校舎へのお別れ

10月には大槌小学校、大槌北小学校、安渡小学校、赤浜小学校合同での学習発表会が行われました。こどもセンターも招待されて、各学年の劇、合唱やダンスを楽しみました。昨年は震災の影響で開催できなかった学習発表会でしたが、今年は何の学年の子ども達もいきいきとしながら立派な演技を披露していました。

11月、12月に各小学校で校舎とのお別れ会が開かれました。お別れ会には在校生、卒業生、地域住民が参加し、それぞれに思い出を振り返り、母校へ別れを告げました。町民の誰もがこのお別れに寂しさを感じていますが、ぬくもりのある母校の姿、校

歌や思い出は子ども達や卒業生の心の中でいつまでも輝き続けることでしょう。来年度からは被災をした4校が合併し新しく1つの小学校になる予定です。

被災地に響く、 澄み渡る歌声

年末は地元出身の歌手の話題で持ちきりとなりました。大槌中学校2年生の白沢みさきさんがデビュー曲

の「故郷 ～Blue Sky Homeland～」で第45回日本有線大賞新人賞と第54回日本レコード大賞新人賞を受賞。町内からは喜びの声が多く聞かれ、明るいニュースにたくさんの元気と力をもらいました。

復興元年ともてはやされた2012年、大槌町もゆっくりと復興に向け歩み始めました。

その一つに災害公営住宅の建設があります。今年の夏には3つの地区に災害公営住宅が完成する予定です。

980戸を建設する予定のうち、1割程度の完成予定ではありますが、目に見える形での復興への取り組みは町民に希望を与えてくれます。土地の区画整理、集団移転促進や公共施設の建設等々、毎月人口が減り続けているこの町には解決しなければならない問題がまだまだたくさんありますが、美しいふるさとをより安全で住みよい街にする為に、2013年も我々町民が力を合わせて復興へ向け歩み続けて行きたいと思います。↳



↳

「子どもセンター」 教育委員会へ移管

9月、子どもセンターは正式にパレスチナ子どものキャンペーンから大槌町教育委員会の管理に移りました。名前も「大槌町子どもセンター」となって、新たに2名のスタッフが加わり、4名の町のスタッフと「パレスチナ子どものキャンペーン」のスタッフである私が常駐し、計5名の職員が力を合わせて日々子ども対応を行っています。

天候に恵まれた秋には戸外で様々な活動を行うことができました。センター前の公園ではサッカー、鬼ごっこ、長縄跳び、かくれんぼ、また

散歩にも出かけ木の実拾い等を楽しんだりしました。自然の中にいる時の子ども達の表情は本当にいきいきとしており、その体力には驚かされるものがあります。裏庭にある畑では野菜がたくさん収穫でき、子どもたちのおやつになりました。

パレスチナとの交流

9月にはパレスチナデーと題し、レバノンのパレスチナキャンプよりいらした歯科医師のムラッド先生、イマッド先生と交流を楽しみました。この日はムラッド先生からパレスチナについてのお話も聞くことができました。映像を見つめる子ども達の眼差しは真剣そのもので、先生の話と自分達の体験した震災とを重ね合

わせ考えているように見えました。私自身、ムラッド先生のお話から多くを学び、励まされました。パレスチナの方々と出会えたことにとっても感謝しています。中東地区に住む全ての方々へ1日も早く平和な日が訪れるよう祈っています。

子どもへの理解・知識を 深めるために

子どもセンターの職員には地域の方たちが勤務し、勉強や様々な遊びを子どもと一緒にしていますが、どのように子どもに接したら良いかわからない時があるとの声があがっていました。そこで子どもに対する理解を深めようと、釜石市の児童館へ

の施設見学や筑波大学より臨床心理士の原口英之先生を数度お招きした職員の研修会を行いました。原口先生の研修会にはセンター職員の他に、地域の保育所や幼稚園に勤める先生方にも声をかけ、発達障害について学び、気になる行動をする子どもへの具体的な関わり方のポイントを学びました。

子どもの発達障害が広く認知されるようになり、その関わりに悩みを抱えている保育者は少なくありません。

ん。専門的な知識を非常にわかりやすくお話しいただき、センターの職員はもちろん、町内の保育所・幼稚園の先生方にも好評でした。研修を終えセンターでは職員がいままで以上に積極的に子ども達と関わりを持ち遊ぶ姿や、子どもの話にゆっくと耳を傾け、気持を理解しようとする姿が見られるようになりました。

冬の遊び

センターではクリスマス会、餅つ

き、編み物、和風作り、みずき団子（餅花に似たもの）作り、雪遊び等を企画し、冬休み期間中の子ども達を迎えました。昔は当たり前のように行われていた地域の伝統行事や遊びもすたれているのが現状です。冬休みにセンターで体験した遊びは子ども達にとって貴重な経験になったようでした。職員も昔遊びや伝統行事を楽しむ子ども達の姿を見て、こういった活動を実施する大切さを改めて確認しました。

◀



◀

今年はたくさんの雪が降り、子ども達も大喜びで毎日のように雪合戦やソリ遊びをして楽しみました。震災以降、子どもの遊ぶ場所が限られている中で、思いきり遊ぶ場があるのは本当にありがたいことです。こうして様々な活動を楽しんだ冬休みは事故や怪我もなく無事に終えることができました。

3・11を前にして

被災後2回目の3月11日が近づいています。犠牲となった方々の3回忌を迎え、町はまた静かに悲しみに包まれていくのでしょうか。

振り返れば今年度も大きな地震が度々あり、その度に子ども達は恐い思いをしてきました。感情やストレ

スを「津波ごっこ」等でストレートに発散できる幼児、酒を飲みづらい記憶を語り合うなどして発散する大人達とは違い、心に大きい傷を負った小学生の子ども達は津波というものに対し、周りの大人達に気を使っているように感じます。これはセンターの職員全員が感じていることであり、大きな地震の後の子ども達の様子から特に感じられます。

センターで過ごしている際に大きな地震が来た時はとても恐がりながらも、必死に避難行動をとります。津波注意報がでた翌日も、多くの子どもは津波の話をしようとしませんし、津波について話をしている所を職員に見られると申し訳なさそうな顔さえします。

3月11日を迎えるにあたり、我々大人達も気持ちが沈んでしまいそうになりますが、子ども達の為にも穏やかな雰囲気の中で関わるよう心掛け、接していきたいと思っています。センターの常連メンバーには津波で家族を亡くした子どもも複数います。子ども達はこの3月11日に何を思うのでしょうか。

子どもにもらった笑顔

私は大槌町や近隣の市町村で保育士として勤務してきました。保育士となって4年目の3月11日、勤めていた山田町の保育所で勤務中に被災をしました。

家族の迎えの来ない子ども達の保育が落ち着き、地震から3日後に大

植に歩いて帰りました。その後、所属していた消防団の活動に参加し、亡くなられた方々の運搬や山火事の消火活動に参加する等して被災直後を過ごしました。

消防団の活動も落ち着くと、私は2ヶ月間、家に引きこもる日々を過ごしましたが、そのうち仕事が無いというストレスとプレッシャーに耐えられなくなり、隣町の釜石市で臨時保育士として働くことにしました。子ども達の前でうまく笑えるか不安

でしたが、^{とうじ}唐丹児童館で働き始め、しばらく経って気が付くと自然に笑えるようになっていました。その時に自分が立ち直れたこと、子ども達に立ち直らせてもらったことに気が付いたのです。このことは一生忘れないでしょう。

常々“いつかは地元の大植で子育て支援に関わる仕事がしたい”と思っていましたが、震災後その思いはさらに強くなりました。そんな折、子どもセンターでの勤務のお話があり

現在に至ります。大植町で保育の仕事ができることにはとても感謝しています。私自身は微力ではありますが、ほかの職員と力を合わせ、少しでも震災で傷ついた子ども達の力になればと思っています。

皆様のたくさんのご支援のお蔭で子ども達に様々な行事や遊びを体験させることができました。これからも大植町と、こどもセンターをよろしくお願い致します。



大植町で おせちを配布しました

日本インドネシア協会の協力で、大植町の仮設住宅に住む高齢者家族（65歳以上の単身家庭、および75歳以上の高齢者家庭）222世帯に対して、2012年12月30日31日の二日間におせち料理を配布することができました。調理と配布については、協力関係にある地元のNPO法人「まちづくりぐるっと大植」をお願いをしました。

おせちを受け取られた方々の声

女性（87歳）「とてもありがたい。自宅が流されてしまい、仮設では狭くて何もできない。家がないとおせち料理を作ろうという気持ちにもなれないのでありがたい」。

女性（84歳）「自宅があったときは手作りでおせちを作っていたけど今はできないのでうれしい」。

女性（67歳）「いい正月になりそう。震災前はおせちを作っていたけれど大きな鍋も流されてしまい今はできない。去年の正月もおせちがなかったので久しぶりのおせちでうれしい。まだお正月でお祝いという気持ちにはなれないけれど、こうやって支援してもらって助けられています」。

「まちづくりぐるっと大植」のスタッフ「今まで作った事のないおせち料理ということで不安な部分もありましたが、一般に販売されているものと比較しても恥ずかしくない、仮設の皆さんに喜んでいただけるものを作りたい、という一心で計画し、無事配布までを終えることができました。その後『こ

の前はありがとうございました』などの感謝の声をたくさん聞くことができ、今後の支援活動をする上でも絆が深まってよかったです」。

